

イザヤ書における終末神学 - 講義ノート（日本語完全対応）

1. 序論：イザヤ書と終末神学

イザヤ書は単なる預言書ではなく、歴史と黙示の橋渡しをする終末神学の宝庫である。

13章以降では、神の主権が全世界に及ぶ裁きとして表れ、同時に義の王と回復の希望が強調される。

2. イザヤ13-27章：諸国民と終末審判

- 13章：バビロンの裁き（黙示録18章と対応）
- 24-27章：小黙示録と呼ばれる世界的裁きと回復
 - 25章「死をのむ勝利」→ 1コリント15章と黙示録21章
 - 26章「死者の復活」→ 復活信仰の発露
 - 27章「レビヤタンの滅び」→ サタンの敗北

3. イザヤ35・65-66章：新創造と栄光のシオン

- 35章：荒野が喜び、癒しと回復の道が示される
- 65-66章：
 - 新天新地（65:17, 66:22）→ 黙示録21-22章との明確な並行
 - 全ての国が礼拝する（66:23）→ 諸国民の礼拝の完成

4. メシア的支配と残りの者

- 11章：霊に満ちた義の王（エッサイの根）
- 10章：残れる者（shear）の救済→ ローマ11章と並行
- 新しいエクレシア（民）の形成を預見

5. 終末神学の総合ポイント

- ✓ 神の支配はイスラエルにとどまらず全世界に及ぶ
- ✓ 終末とは、裁きの終わりではなく、義と平和の始まり
- ✓ メシアによる創造の刷新、新天新地の約束
- ✓ 礼拝の回復：諸国民がシオンに集うビジョン（2:2, 66:23）